特集 自然とのふれあい

〝自然〟の中で〝自然に〟過ごすということは…

てんとう虫幼児園
園長　林　恵子

てんとうむし幼児園は、京田辺市の大住という所にあります。山や林、田んぼなどが近くにあり、子どもたちはその中で遊んでいます。『自然とのふれあい』というテーマをいただき、〝自然〟とは？と考えてみました。ひとつは、文字通りの〝自然〟です。そして、もうひとつは〝自然な〟または、〝自然に〟ということではないかと考えました。この2点から『自然とのふれあい』について記してみたいと思います。

〝自然〟～季節を感じる～

当園の近くには、四季を通して遊びに行く山があります。開園以来18年間、この山で子どもたちはいろんなことを学んできました。

㊥の山は、ステキな滑り台として斜面を用意してくれています。入園当初、この斜面の上り下りが怖くて泣いていた子どもも、年長さんになると、ダイナミックな滑り方に挑戦します。着地に失敗しても、フカフカの落ち葉が守ってくれることを、ちゃんと知っているからです。また、春は、つくし摘みを楽しみます。子どもたちと春の山との約束は『ちっちゃなつくしは、そっとしておこうね』です。こうして、春の命をいただいています。

㊦の山は、木々の葉をたくさん茂らせてくれます。そこでは、いろんな虫と出会います。小さい子どもは、虫を見つけて喜び、年長さんは虫を捕まえて喜びます。遊び疲れた子どもたちは、山で寝転び空を見上げると、木々の間から、こもれ陽が目に入ります。「うわぁ…」と、子どもたちが小さく叫びます。山は、風も運んできてくれます。また、夏は、くずの葉採りをします。当園で飼っている、うさぎのエサになるのです。夏にたくさん採って、乾かし、秋・冬に備えます。子どもたちと夏の山との約束は、『うさぎさんが喜ぶよ』です。こうして、夏の命をいただいています。

㊧の山は、たくさんの落ち葉を用意して待っていてくれます。子どもたちは、落ち葉拾いが大好きです。ひとつとして同じ色合いの落ち葉は、ありません。それが子どもたちの心をくすぐるのです。何ともいえない色たちに囲まれて過ごします。また、秋は、あけび採りや栗拾い、柿採り、むかご採りなどを楽しみます。子どもたちと秋の山との約束は、『鳥やリスやサルの分は、残しておこうね』です。こうして、秋の命をいただいています。

㊨の山は、暖かさを用意してくれています。冷たい風も、山の中では木がさえぎってくれます。そして時折、陽だまりも用意してくれるので、子どもたちは安心して遊べます。また冬は、木も虫も眠っています。子どもたちは、決して芽は採らず、虫も、捕りません。子どもたちと冬の山との約束は『待っててね』です。

13/10/09 20:03

〝自然〟～知恵比べ～

このように遊ぶ子どもたちに対し、自然は、時に、挑む機会をくれます。田んぼで遊ぶ子どもたちは、トノサマガエルを、捕まえるのが大好きです。

ある日、散歩の時に聞こえてくる「モーモー」と鳴く声に、とても興味を示しました。あの鳴き声は、〝ウシガエル〟だと教えましたが、子どもたちはピンときません。そこで、散歩の度に〝ウシガエル〟をみつけようということになりました。ウシガエルは、用心深い為、人間の気配を感じると、サッと水の中に入ってしまいます。いろんな人からアドバイスをもらい自分たちでいろいろ考えました。ウシガエルは両生類だから、必ず水面に出てくる時があります。そこがチャンスだと教わりました。

子どもたちと、何度かシミュレーションを重ね、釣り竿と疑似餌を持ってウシガエル捕りに出かけました。ウシガエルのいる池の近くまで来ると、静かに静かに歩きます。そして、年長さんの「あそこにいる!!」の声で焦点を定めます。そこに、つり糸を静かにたらします。すると、すぐにウシガエルがものすごいジャンプ力で、飛びつきました!!しかし、失敗…。

今日は、もう警戒してダメかもしれないと思いましたが、年長さんはジーッと池を見つめています。静かな中に、張りつめた空気が流れます。「あっ!!あそこ」の小さく鋭い声に、釣り竿を動かしました。すると、ウシガエルが喰らいつきました。地面にひき上げ、バケツをかぶせて何とか、捕まえることができました。「…ヤッター!!」「きゃ～」と喜ぶ子どもたち。固い握手を交わす職員。

そして、ふと見ると年長さんの女の子が「よかった、よかった」と言いながら泣いています。この涙にはいろいろな思いが込められていると思います。ウシガエル捕りに行こうと決めた日から、散歩の時に通るお地蔵さんに手を合わせて、お願いをしてきました。そして、年長さん全員が揃った日に出かけるということも、大事なことでした。出発の日は、年中さんが「動物とちびっこちゃんのお世話は、まかせて！いってらっしゃい」と園を守ってくれました。年少さんと小さな子どもたちは「お花と畑に、お水、やっておくね」と言って送り出してくれました。年長さんは「ウシガエル、捕まえてくるからね!!」「ぱんだグループ（年中）さん、動物のこと、よろしく」「ちびっこちゃんはケンカしないで待っててね」と、手を振って出かけました。

子どもも大人もひとつの目標に向かって一生懸命になる、心をひとつにした中でのウシガエル捕りだったのです。捕まえた喜びと達成感、捕まえられたうれしさと安堵感が、涙となって表れたのだと思います。その女の子は、おかあさんに「うれしかってん」と伝えたそうです。この成功に気を良くして、次は、ものすごく大きなウシガエル（親分）捕りに挑戦しました。しかし、この親分は、肺活量がすごく、なかなか水面に姿を現しません。そして、姿を現す場所を次々と変えるのです。さすが、長年、生きているだけのことはあります。子どもたちも「すごいな～親分は…」「なんでジャンプして、エサ食べへんのやろ」とギブアップしました。

こうして一

補導だより306号秋.indd 10-11

旦ウシガエルの親分捕りは終了しました。しかし、子どもたちは「次こそは!!」と前向きなのです。また、仕切り直しです。翌日、再挑戦しました。子どもたちは、池の周りに昨日よりさらに身を低くして集まり、用心深く構えました。

私たち大人は、釣り竿の数を増やしました。疑似餌に反応する、トノサマガエルやカメを追い払うのも容易ではありません。そして、遂に親分は姿ではなく、光る目玉を現わしました。子どもたちは「捕まえられる!」と興奮しました。しかし、何度か光る目玉を出しただけで、終わってしまいました。このように、自分たちの思い通りにならないことが、自然の中にはあります。それは、ごくごく自然なことなのだと思います。子どもたちは、「親分はすごい」と称え、悔しい気持ちを持ちながらも、清々しく引き上げてきました。園で待っている、小さな子どもたちも「さすが〝親分〟!!」と捕まえられなかったことを、スッと受け止めていました。

数年前の朝日新聞のコラム欄に、建築家の安藤忠雄さんの文章が載っていました。〝子ども会の行事で、魚を捕まえるイベントを企画した大人たち。そこで、子どもたち全員が確実に捕まえられるように、川に、魚を大量に放流し、簡単に魚を釣り上げる子どもの姿を見て親たちが、満足していた〟という内容です。このようなことは、自然の中ではあり得ない、不自然なことだと思います。うまくいかないことに対面した時に、「悔しい」「どうしたら良かったのだろう」「もう一度、挑戦しよう」と、心が動きます。だからこそ、成功がうれしく、また自信へとつながっていくのだと思います。それが自然だと思います。こうして、子どもたちは、本物の自然とふれあうことで、感じて学ぶのだと思います。

〝自然〟～生命を感じる～

『自然とのふれあい』ということは、『命とのふれあい』につながることだと思います。〝死〟に向き合うことは、また、自然なことだと思っています。当園には、4羽の鶏がいました。7月下旬、とうとう最後の一羽の鶏が死んでしまいました。6才の誕生日を迎える1ヵ月前でした。この鶏は、当時の年長さん（現在小学校6年生）が、譲ってもらってきました。小さな、小さなヒヨコで、みんなから可愛がられました。カラスや猫に襲われないようにと、守りながら、広場を散歩させました。

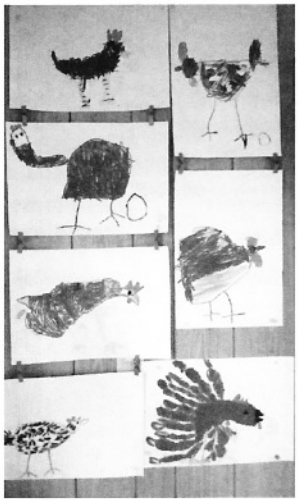
子どもたちは、ヒヨコに…と家から、パンやレタス、キャベツなどを持ってきて、お世話をしました。畑で、ミミズを捕まえては、ヒヨコにやっていました。いつの間にか、ヒヨコは、鶏になり、タマゴをうむようになりました。すると子どもたちは、家から貝殻を持ってきて、細かく砕いて鶏にやっていました。鶏たちも、それに応えるように、毎日、タマゴをうんで、子どもたちにプレゼントしてくれました。それから、1羽、また1羽と順番に力尽きていった鶏たち。その度、涙しながらお別れしました。

そして、最後の1羽はとても長生きでした。この頃から『こっこさん』と呼ばれ始めました。砂場で遊ぶ子どもたちの傍らで砂浴びをして、子どもたちに砂をかけたり、畑の土を掘り返す仕事もしてくれました。鶏当番さんは、鶏糞を畑に撒いて土作りをしました。お陰で、おいしい野菜がたくさ

13/10/09 20:03

ん採れました。また、入園式や卒園式にも、子どもたちと一緒に参列しました。年長さんの卒園を祝い、新入児たちを歓迎してくれました。本当に子どもたちと仲良しでした。

そして、この夏―こっこさんは、歩くのもままならなくなってしまいました。子どもたちは、毎朝、心配そうに声をかけていました。こっこさんは、その度に目を開け、顔を上げていました。そこで、こっこさんの絵を描くことにしました。ジーッとこっこさんをみつめてなかなか描こうとしない子どももいました。「タマゴ、ありがとう」「賢かったなぁ」「いっぱい遊んでくれてありがとう」等、声をかけながら描く子どももいました。年長さんの女の子は、近いうちに訪れるであろう〝死〟を感じてか、泣きながら描いていました。絵を描いてもらった翌日の早朝に、こっこさんは死んでいました。お墓を作り、こっこさんを埋めました。



子どもたちの泣き声は、どんどん大きくなります。〝死〟という、避けては通れないことが自然の中にはあることを、子どもたちは学んだのだと思います。こっこさんが死んで数日経ったある日のことです。小さな女の子が鶏小屋をのぞいて、不思議そうな顔で「こっこさん、いない」と言いに来ました。「こっこさんは死んじゃったね。いなくなったんだよ」というと「バイバイやな」と小さな女の子は答えました。〝死〟ということがストンと落ちた瞬間だったのだと思います。自然の中で、繰り返されている〝生〟と〝死〟に、このように自然な形で出会うことは、子どもたちにとって大きな宝物だと思います。

おわりに～自然から教わること～

『自然とのふれあい』は、自然な流れを大切にすることで、自然に多くのことを学ぶことだと思います。春には春を、夏には夏を、秋には秋を、そして冬には冬を楽しむことが自然を感じることだと思います。そして、自然の中で生きているということは、〝死〟にも向き合うことだと思います。理路整然とした言葉で表現できない〝自然〟という物と幼い時から向き合うことで、それは、やがて雄弁なものに変わっていくのではないでしょうか。

〝自然〟は、絶えず形を変えていきます。自然の中で遊ぶ学ぶ子どもたちは、アンテナを張り巡らし、形を変える自然を感じ、その変化を考え、表現しています。この柔軟さ、臨機応変さが、生きる力となるのだと思います。また、〝自然とのふれあい〟を経験すると、自然に対する畏敬の念を抱くようになります。それは、やがて自分ひとりでは、立ち打ちできなこともあるという、謙虚な気持ちへと形を変え、誰かと協力し合うことになります。

こうして自然を大事に思うことは、命、すなわち〝自分〟を大事に思えることにつながると思います。その為にも、今、自然の中で胸いっぱいに自然を吸って体に、心に満たしていきたいと思います。

Profile
プロフィール

林　恵子（はやしけいこ）

てんとう虫幼児園園長。1959年新潟市に生まれる。8年間奉職後、結婚し京都で保育士として仕事を続け、てんとう虫幼児園を開園。飼っている、ゴールデン・レトリバーの朝晩の散歩が日課です。

補導だより306号秋.indd 12-13